

令和7年度 愛媛県総合教育会議議事録

1 開会の日時及び場所

令和8年3月10日（火）午後2時30分

伊予高等学校 本館2階 会議室

2 出席者

愛媛県知事 中村時広

教育委員会 教育長 高岡哲也 委 員 関 啓三 委 員 北須賀逸雄
委 員 畠山千愛 委 員 田坂文明 委 員 山下由美

3 会議の概要

(1) 開 会（午後2時30分）

（事務局 副教育長） ただいまから、令和7年度愛媛県総合教育会議を開会いたします。開会に当たり、知事から御挨拶をお願いいたします。

（中村知事） 本日は令和7年度の愛媛県総合教育会議を開催するに至りましたが、皆さんお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

この総合教育会議は、本来、教育行政は教育委員会が全てを担っている訳ですけども、数年前に知事部局との連携というものを、国の方で、これ要請でもあったんですけども、道筋をつけるということで、こうした会議が開かれるようになりました。

それまでは、知事部局というのは、教育委員会が行うことの予算の審議のみを行うことだけであったんですけども、そもそも公約等々の協力関係もありますので、それをやっぱり共有していただくことの重要性を常に訴えてきた立場でもありましたので、こうした会議が開かれることによって、より情報、現状を共有しながら、教育分野の政策が進められる土俵が出来たのではなかろうかというふうに思ってます。

特に今、県立高校は、愛媛県県立学校振興計画を全体的に行い始めたところでありまして、伊予高校におかれましては、新しく理数情報科、そして芸術科、教員養成コースを新設するということになっておりますので、本当に各学校も特色ある学校づくり、そして生徒の皆さんが、本当に将来、ここで学んでよかったなという、大事な役割を果たすということで、工夫や知恵を絞らなければいけない時代に入っていると思います。

今日はその先生方、そして生徒の皆さんにも御参加をいただきまして、現状、あるいは時代のニーズに合った教育のあり方、議論を積み重ねながら、模索していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。御挨拶とさせていただきます。

今日はよろしくお願いいたします。

(2) 議 事

報告 「業務量管理・健康確保措置実施計画について」

(事務局 副教育長) それでは会議を進めてまいります。まず、業務量管理・健康確保措置実施計画について、事務局から報告をさせていただきます。

(事務局 教育総務課長) 業務量管理・健康確保措置実施計画の策定につきまして、御説明いたします。

御手元の資料「愛媛県学校における働き方改革推進方針（第3期改正）【概要】」を御覧ください。

令和7年6月の給特法等の改正に伴い、各教育委員会では、業務量管理・健康確保措置実施計画の策定・公表が義務付けられましたけれども、本県では、「指針の位置付け」に記載のとおり「愛媛県学校における働き方改革推進方針」を同計画として位置付けることといたしました。

資料の「目指すところ」に記載のとおり、本計画の目的は、教職員の心身の健康を保つとともに、誇りややりがいを持って能力を発揮できる環境を整え、子どもたちへ効果的な教育活動を行うことで、本県教育の質の更なる向上を図ることにあります。

このため、「取組の柱」になりますが、(1) ICTの活用や業務の見直し、(2) チーム学校の推進、(3) 部活動の負担軽減など、重点的に進める事項を年度ごとに見直しておりまして、学校現場の最前線に立つ教職員が心身ともにゆとりをもって子どもたちに寄り添い、働きやすさと働きがいを実感できるよう、今後とも全力で取り組み、学校における働き方改革を力強く前進させたいと考えております。

報告は以上になります。

(事務局 副教育長) それでは議事に移らせていただきます。ここからの議事進行は中村知事をお願いいたします。

議題 「多彩で特色ある教育の推進」

(中村知事) それでは本日は、「多彩で特色ある教育の推進」を議題としております。まず、伊予高校から取組の紹介をお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

(伊予高校校長) 本日は、伊予高等学校を会場に総合教育会議を開催していただき、誠にありがとうございます。それでは、本校の取組について報告させていただきます。

本校は、今年度で創立43周年を迎える比較的新しい学校であり、普通科の単科校として歩んでまいりました。キャリア教育を通して幅広い進路に対応すること、地域との連携や協働を通して探究型学習を充実させ、未来を切り拓く力を備えた人材を育成することというスクール・ミッションに基づきまして、学校運営に取り組んでまいりました。

ここからは、その中心となっております教員と交代いたします。

（伊予高校教員） 先ほど御覧いただきました、総合的な探究の時間に松前町長が生徒と対話しながら、松前町の魅力や課題について話している様子です。このように、町1校ということで、地域との連携、行政との連携が力強く行われております。

また、キャリア教育にも力を入れておりまして、今年度から継続的にジョブカフェ愛workとの連携を進めておりまして、社会人基礎力をベースにキャリア教育にも力を入れております。

また、松前町には力強く活躍する中小企業がありますので、企業との連携も充実させております。

大学の連携につきましては、今年度から「伊予高キャリアセミナー」ということで、大学の出張講義を生徒たちが学ぶことができ、生徒の進路選択の助けになるような講座も充実させるように力を入れております。

このように、キャリア教育や地域連携を力強く進めながら、社会人基礎力を伸ばしながら、生徒の自らの未来を自らの力で切り拓くということに力を入れておりまして、外部連携につきましては、昨年度、128件の取り組みをすることができました。今年度については、200件を超える見通しになっておりまして、今年度も充実した取組ができております。

それでは、本校のキャリア教育の柱となっております総合的な探究の時間を、こちらでは「探Q」と呼んでおりますが、その「探Q」についてお話をさせていただきます。

大きく特徴が三つあります。一つ目は、どの学校も探究活動やっておりますが、本校は週2時間連続した形で行っているということで、活動時間が充実しております。そのため、大学や企業と連携した講座が充実しているというのが大きな特色の一つです。

二つ目は、全学年の縦割りで探究活動を行っているということです。生徒たちは、クラスの友人、そして、部活動の友人、更には、「探Q」での人間関係ということで、多様な価値観に触れることができるのも特色です。

三つ目の特色は、生徒の進路や興味関心に応じて選択できる講座を24用意しておりますので、自分自身の興味・関心や進路希望に応じて夢や将来に近づいていくことができる探究活動が行えるということになっております。

今回は、その探究講座の中から一つ、「地域のリーダーに学ぶ リーダーシップとマネジメント講座」の取組について紹介をさせていただきます。

それでは生徒と交代いたします。

（伊予高校生徒） 私たちの授業は、松前町の方々に直接取材をし、リーダーシップを研究する活動をしています。

松前町の魅力に気付き、商品や企業の魅力を発信するために、愛媛新聞社と連携をし、ハーベストさんとギフトカードの作成を行い、商品販

売を行いました。具体的には、松前町の企業について調べ、直接取材に行きました。

(伊予高校生徒) こちらが、実際に私たちが作成したギフトカードです。私たちのギフトカードのこだわりは、次の三つです。

一つ目のこだわりは、一番魅力を伝えたい商品や事業に対しての思いをお聞きし、それらをギフトカードに詰め込んだことです。商品紹介ページには、私たちが作成した記事がありますので、是非読んで魅力を知ってもらいたいです。

二つ目は、美味しそうに見える写真です。プロカメラマンの石川さんから、商品に光を当て過ぎると見えなくなってしまうので、光を程よく当て、更に商品の近くから撮るなどの工夫を教えてくださいました。

(伊予高校生徒) 三つ目は、見た目を作るデザイン、考え方、仕組みのデザインです。デザイナーの本間さんに、チラシやポスターのデザインを教えてください、伝えることを明確にし、それに沿ってポスターを作ることを学びました。学んだことを踏まえて作ったポスターやチラシのデザインがこちらです。ギフトカードには、例えば、「ロルトラーノ」さんの、砂糖の約100倍の、柔らかな自然な味わいを楽しめる松前町産のリコリスティーや、松前町の和菓子店「蜜彩」さんのどら焼きなど9商品を掲載しております。

(伊予高校生徒) この活動を通して、商品開発に対する思いや、仕事へのこだわり、松前町に対する愛着についてお話を伺い、「この味を守り続けたい」、「地域の人に喜んでもらいたい」といった声から、地元の産業を支えているのは、人の思いであることを実感しました。

私たちも松前町について、今まで以上に深く知ることができ、とても楽しい時間となりました。

完成したギフトカードの個性あふれる商品には、それぞれの背景にあるストーリーを込めています。一つ一つの商品を楽しむことを通して、私たちの取組の成果や事業者の方々の地域に対する思いを感じていただきたいです。

是非、大切な方に、私たちのギフトカードを送ってください。

以上で発表を終わります。ありがとうございました。

(伊予高校教員) 本年度の入学生、1年生の42パーセントは、本校の地域と協働した探究活動に魅力を感じたということで、本校を選んでいただいております。このように、地域の協働した探究活動が本校最大の力になっているというのが大きな特色です。

ここからは、令和8年度よりリニューアルいたします、本校の特色についてお話をいたします。

普通科に加えまして、理数情報科、芸術科、そして教員養成コースは普通科と芸術科に誕生いたします。

その特色と先行的に取り組んでいる内容についてお話をさせていただきます。

きます。

まず理数情報科です。

理数情報科は、大学進学に特化した県内初めての情報学科になっております。いわゆる、普通科の理系コースの生徒たちが学ぶ「数学Ⅲ」、「物理」を履修した上で、プログラミングやデータベースなど、情報の実践的な学びが充実しているというのが特色です。

また、高大連携や企業連携に力を入れておりますので、将来のデジタル人材の育成に力を入れてまいります。

続きまして芸術科です。

芸術科も県内初めてであります。最大の特色が音楽・美術・書道の三つの専攻を備えているということになっております。

先ほどレッスン室を御覧いただいたと思いますが、あのような形で専攻ごとの専門教室を用意しており、1年時から技術を高めることができます。

こちらの写真は、女子美術大学の先生に講師として来ていただいて、クロッキーの教室を開いていただいている様子です。このような形で、芸術科においても、高大連携に力を入れながら、専門技術を学んで、社会で活躍する人材を育成していきたいと考えております。

最後は教員養成コースです。

教員養成コースは、教員採用まで見通して、愛媛の将来の教育の担い手を育てることがキーワードになっております。

この写真は、今年度、伊予市の翠小学校に教育体験に行かせていただいた様子です。この取組は、いわゆるボランティアではなく、通常の授業として行うというところに特色があります。そのため、継続して行うことができますので、教職のやりがいや、教える楽しさをしっかりと学ぶことができるという特徴があります。

こちらの写真は現任教員との交流型事業の様子です。このような交流型授業も充実させていきながら、愛媛で先生になりたいという気持ちを高めていきたいと考えております。

(伊予高校校長) 最後に伊予高校は、松前町にあるということで、この松前町との連携をベースとしまして、地域密着型の学校といたしまして、地元の大学及び企業と連携した学び、そして、産学官の特徴を生かした、学科を横断するような学び、それを大切にしながら、特色ある進学ができる進学校を目指していきたいというふうに考えております。

御清聴ありがとうございました。

(中村知事) どうもありがとうございました。本日は、今お話しもありました伊予高校の取組を踏まえて、意見交換を進めていきたいと思えます。まずは委員の皆さん、どなたからでも構いませんので、御意見がある方は挙手をもってお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

(関委員) 今日は伊予高校でいろいろな場面、演奏、書道パフォーマンス

ス、教室での授業等、見せていただきまして、ありがとうございます。

伊予高校を見せていただくという中で、やっぱり県立学校の振興計画、これに基づいて、来年度から新しい高校が5校、そして、新しい学科が24学科設置をされる。いよいよ、前期計画が本格的にスタートすることになったと思いますが、いろいろ新しいことをするという事で対象校では、生徒の多様な進路に応じた新しいカリキュラムの編成をはじめ、学校によっては、新しい校旗・校章、そして制服といったものが制定される。学校の開校・学科開設に向けた準備が大変大詰めを迎えているというふうに思います。

ここ、伊予高校でも、県内初となる教員養成コース、そして、理数情報科、芸術科が設置され、また、北条清新高校など昼間二部定時制と通信制を併置する学校もできるということで、いろいろ学校自体が多彩で魅力的な教育活動が展開されるということになると思います。

しかしながら、これからの振興計画の後期については、計画としては大まかな計画が示されておりますけれども、それぞれの県立高校が今後更なる魅力化と特色化を進めていくということが非常に大きなポイントになると思っております。

そういうことで、今後の魅力化、特色化というのを更に進める上で、どのようにそれぞれの学校が考えておかなければならないかということで、その点を踏まえておくべきポイントについて、どういう点があるのかということをお伺いしたいなと思っておりますので、よろしくお願いします。

(中村知事) 本当に県立学校は定員割れのところもあれば、全体的には、平均すると、ずっと1.0を下回ってますから、一つの原因としてはこれ少子化という問題もあるんだけれども、だからそういう中で、学校を何とか残そうという取組も、これまで以上に高まってきています。

伊予高校の場合は中予にありますから、南予と比べると恵まれている状況にもあると思っておりますけれども、ただ、それ以上に厳しい環境の中でやってるところも、本当に学校の工夫、魅力化によって、県外からも含めて、多くの生徒が来るような学校も登場し始めました。

水族館部が活躍した長浜高校しかり、馬術部が活躍した北宇和高校しかり、それから東京から来たメンバーが、生徒自らが東京へ出向いて、勧誘活動まで先生と一緒にやるような取組で、三崎高校も本当に今、活気を呈するようになりましたし、これまで以上に、場所を問わず、各学校が特色づくりに知恵を絞らなければいけない時代に入っていると思います。

また、カリキュラムの面においても、これまでの時代が求めていた、試験ができればいいというような人材ではなくて、大学そのものも変わってきてますし、AO入試が拡大する、あるいは課題解決型のカリキュラムが充実してきた。時代、時代で、大学教育も変わり、また企業、社

会が求める人材像も大幅に変わってきています。

そういう意味では、学校の魅力化の、カリキュラムの工夫っていうものが、今を生きる、若い世代の将来にも大きな力になるのではなかろうかというふうに思います。

そういう中で、先ほど説明しましたけれども、伊予高校では僕の印象では吹奏楽に憧れて伊予高校に行きたいっていう声をよく聞いてたんですけども、先ほど本当に学校が色々取り組んでいる一つの新たな道筋として探究というものを全面に展開し、そしてそれに魅力を感じてくる生徒が増えてるっていう話に大変関心を持ちました。

是非、今の関委員のお話も含めて、先生に、魅力化を更に図っていくため、どんな目標とか、コンセプトを設定されてるのか、ちょっと御発言いただけたらと思います。

よろしくお願いします。

(伊予高校校長) 伊予高校の立地というのが、まず一つ問題になると思うんですが、松山市の周辺にある学校で、松山市の外にある学校です。

松山市内と同じことをしても生徒は集めることはできないし、多分存続の意義もないだろうというふうに私は考えておりまして、今、伊予高校は、松前町という面積の小さな町と本当に連携をさせていただきまして、いろんなことをやっております。

この連携の中で、まず松前町、それからその周辺の松前町に近いところからたくさんの生徒が来てくれるようになりました。これがまず一つ、うちでは大事なことなので、まずこれを、進めていきたい。地域連携をまず、しっかり骨組みに置いておきたいということでもあります。

それと、うちの特徴というのが、三つの学科があるということです。今まで三つの学科を連携させたって例はないと思うんですが、方向としては、学科連携型で、他にないような価値のあるような教育ができたというふうなことを考えております。

それから、もう一つは、そういったことに関しまして、ちょっと試験で計れないような、今回もあったと思いますが社会人基礎力であるとか、ああいった指標を使いながら、生徒の本当の力といいますか、見えない学力を伸ばしていきたい。

それが地域に認められれば、伊予高校は存続していけるというふうに信じております。

以上で答えになってるかどうか分かりませんが、終わります。

(中村知事) どうもありがとうございました。よろしいでしょうか。

ほかにいかがでしょうか。

(北須賀委員) 私の方からは、デジタル人材についてお願いしたいと思います。

先ほどは伊予高校の皆さんに大変特色ある授業を見せていただきました。ありがとうございました。

現在、全国的にデジタル人材の不足が叫ばれておりますけれども、県立学校振興計画では、来年度から、伊予高校など6校に理数情報科、情報マネジメント系列が設置されることとなっております。

大学、企業と連携した実践的な学び、STEAM教育、DX教育などの取組が注目されております。先ほどのギフトカードがまさにSTEAM教育に資する取組ではないかというふうに思いました。

先ほどのプレゼンでも御紹介いただきましたけれども、理数情報科が設置される本校では、松山大学情報学部と連携して、大学内に新設される情報学部等の最新施設、設備を利用した課題研究が予定されていると伺っております。

昨年9月には、松山大学の連携特別授業が実施されており、参加した中学生、保護者の皆様は、理数情報科から魅力を体験することができたというふうに考えております。

今後は県内の大学だけでなく、地元企業との連携が期待されるわけですが、次世代の愛媛のDXを進める高校生などのデジタル人材の育成について、お伺いできたらと思います。よろしくお願いします。

(中村知事) 私の方からお話させていただきたいと思いますが、そもそも、このDX人材の育成、政策を展開するに至った経緯がありまして、今から7年前だったと記憶してはいますが、世の中に5Gという技術が登場しました。5（ファイブ）という名のとおり、それまで4Gまでは来てたんですけども、この当時までは、スピードアップと容量の拡大を追求する技術開発だったんですが、5Gの段階に入ってきますと、同時接続と遅延速度圧縮という二つの技術が付加されました。これはもう全くステージが異なって、画期的な時代が来るなという直感があったんですけども、何せ素人なんで何が起こるか分からないということで、東京に行きまして、先端のIT産業何社か訪れて、何が起こるんだと、その時点（7年前）に聞きますと、ひょっとしたら医療分野でこんな高度なことができるようになるかもしれない、交通分野でこういう可能性が見えてくるとか、誰も答え持っていないんですね。何が起こるかかわかんないけど、大幅に変わるだろうと。その根拠というのは、さっきの二つの技術が付加されることによって、本格的にAIがフィールドに乗ってくると、AIがフル活用できる時代が来るってということだけには分かりました。その時に県では7年前に県庁の中に「プロモーション戦略室」というのを設けまして、ただこれもね、若い年代じゃないとついて来れないんで、各部局の若手職員を集めて、この5Gで何が起こるかっていう研究してほしいと。目出しの政策をやり始めると。何が答えかは見えませんが、走り始めなかったらすぐに周回遅れになるだろうってということがスタートだったんです。

そうこうするうちに、スタートアップ企業の育成も絡んでくるし、いろんなフィールドが見えてきました。そこで体系的に整備するために、

「行政のDX」と「産業のDX」、「暮らしのDX」、この三つをしっかりと見極めた上で政策を進めていこうというふうな基本構想を立ち上げました。

取り組んだのが、当時はもう手探りだったんですけども、「EGFプログラム」という、要はその提案型の事業、スタートアップ企業の提案募集ですね、ここに民間と金融機関と我々も入って、審査して、これは可能性ありという提案については、金融機関は資金的な融資だとか、あるいは行政の伴走支援であるとか、企業のアドバイスとか、こうしたことで離陸してもらおうというような事業を始めました。もうここから起業につながった会社は何十社出てきてますけども。

次に、更にその前の段階の人材育成ということで、愛媛県は島がある。島で集中講座を開いてみようということで始めたのが「ドラゴン研修」という制度でありまして、3ヶ月間、詰め込みで研修してもらって、この期間に経営の基礎であるとか、あるいは財務の基礎であるとか、それからプログラミングであるとか、スタートアップするにあたっての基礎教育、もう3ヶ月にみっちりやるというような事業が始まっています。

そこでだんだんだんだん離陸ができたんで、次にやったのは「トライアングルエヒメ」というものです。これは愛媛県をフィールドにして、最新のIT技術を活用して、実装検証をやりませんかという呼びかけを全国にいたしました。驚くことに、いろんなバックアップ制度を作りましたら、全国から1,500の応募があったんです。専門家に審査してもらいまして、そのうちの115案件を採用しまして、既に県内で実装検証が始まっています。

イメージのポイントですが、例えば、かんきつを生産する職人さんの経験だけでやってたものを数値化して、それを新しく参入する方々にソフトを提供することで、職人並みの技術をすぐに栽培で展開できるようになるとか、あるいは、漁業で言えば、魚の動向をAIで分析をして、その習性というものを見極めた上で、AIが判断し、自動的に餌をやる機械の開発、これも人件費も格段に安くなりますから、コスト安につながる。こういうようないろんな実証を今、愛媛県中で行っています。

そのねらいは、IT技術を誘致するということもあったんですけども、自分の中で考えたのは、そういう「トライアングルエヒメ」で愛媛県を実装フィールドの場所を選んでくれた企業が、あるいはオフィスを構えて、地元の子を採用してくれるツールが流出人口の抑止にもつながるんじゃないかなっていうようなことも考えたんですけども、やってるうちに壁にあたりました。

やっぱり人材育成だと。ここが一番大事な点なんだということで、その当時3、4年前だったと思いますけど、愛媛大学と松山大学と人間環境大学と松山東雲女子大学の学長に会いまして、新しい情報学部や学科を作ってほしいと要請をさせていただきました。最初はちょっと「学部

ですか…」というような反応だったんですけども、熱意が通じて、四つの大学が一斉に新しい情報学部・学科を作るということで合意に至りました。大学自体も競争なんですけども、うちの大学ではこのレベルの人材育成をします、うちではこの上の育成をしますと、うちでは高度人材育成しますと、棲み分けをしながら、デジタル人材の育成ということを始めてもらいました。

あと2年後に第1期生が世の中に出て来ますので、「トライアングルエヒメ」で来た企業は、あと2年経ったら、愛媛県からデジタル人材が卒業してくると、オフィス構えようということで、もうすでに約20社が愛媛県にオフィスを構えてくれるようになりましたので、県内でのデジタル人材の就職の道にも結びついていくじゃないかなというふうに思っています。

大学はこれでスタートを切ったんですけども、大学の前の段階で、デジタル人材の育成をやるべきじゃないかというふうな判断をしまして、当時知り合いの伝手で先生がそもそも足りないということで、プログラミングでそういう人材育成できないかって言ったらそれを得意とする会社と出会いまして、これを東予・中予・南予1校ずつモデル校に指定して、そのソフトを使ってやってみたら非常にいい結果が出たんです。それでこれはもう全県に拡大をしたという経緯があります。

それから、先月、東京大学へ行きまして、今、日本の国内でAIの研究では最先端を行っている東京大学の松尾研究室というところがあります。その松尾先生とお会いしまして、非常に方向性良しということで、愛媛県と東京大学の間で連携協定を締結しました。これはネット上で、トップクラスの高度AI人材を育てる講座を開設するというので、既に愛媛県内の大学生たちがこれを受けて合格している子が出てきてまして、愛媛に居ながら高度なデジタル人材の育成につなげるというような準備をしています。

更に、令和8年度から、小学校、中学校、高校生全てを対象にしたプログラムを用意する運びとしています。特に高校生向けには、年間を通じてAIを学んで実践する「えひめAI部」というのを創設する予定で、こういったことも現場の方でも、その県の全体の流れっていうものも受けとめていただいて活用していただけたらいいんじゃないかなというふうに思ってます。

非常にこの世界は早いですから、今、我々、生成AI以外の議論をしていますけれども、もう次のAIの技術が登場すると思います。フィジカルAI。次の段階入っていきますので、もう本当にちょっと油断したらすぐに遅れてしまうというような世界なんで、しっかりと世界、世間の、社会の動向を見極めながら、県の政策に結びつけていきたいというふうに思いますのでよろしくお願いいたします。

(中村知事) ほかにいかがでしょうか。

(畠山委員) 今日伊予高校の皆さん、授業の様子を見せていただきました。ありがとうございました。最後に見たレッスン室なんですけれども、限られたスペースのところに8つのレッスン室を作って、うまく取り込んでたなと思って見ていました。これからも、頑張って勉強してください。

それでは私の方からは一点、芸術教育や文化の振興について伺いたと思います。

先日、教育委員の皆さんと今年度からゲームクリエーションコースを新設した松山南高校の砥部分校を視察させていただきました。実習室には企業が使うような最先端のパソコンがずらっと整備されていて、ゲーム制作会社による特色ある本格的な授業が実施されていて、美術やデザイン系の進路を目指す生徒たちが夢に向かって、目を輝かせて学ぶ姿が大変印象的でした。

本日視察させていただいた伊予高校も、来年度からは、音楽・美術・書道の3専攻において、専門教育のカリキュラムが設定されております。芸術科の生徒たちの豊かな感性を育み、確かな技術や最新の知識を習得できるよう、様々な施設整備が進められていて、現在、県内外の芸術系の大学との連携を生かした実践的な学びが受けられると聞いております。

そして、令和10年度には、本県で国民文化祭が開催されます。そこで、今後の愛媛の芸術教育や文化の振興について、知事のお考えをお聞かせください。

(中村知事) これまでどちらかというとスポーツの方のイベントが目立っていたと思うんですけども、スポーツ芸術文化っていうのは、その道々に魅力があるのはもちろんなんですけれども、これを通じて、例えばスポーツであれば、する楽しさもあれば、見る楽しさもあれば、応援する楽しさもあれば、支援する楽しさもある。

そしてそこに集いし人たちが結びついていて、人の幸せにつながる。あるいは、文化芸術は、僕もこれは本当に気がつかなかったんですけども、文化芸術というと、見るもの、美術館へ行って鑑賞してもらって、良かったねっていうものかなと思ってたんですけども、そうではなくて、実は地域の活性化であるとか、企業の成長にも結びつく力を持っていることを知りました。

一回、東予地域で、東予というのはものづくりの会社が多くて、工場が多いんですけども、「えひめさんさん物語」っていう、この東予の工場地帯を利用した文化、芸術の取組をやろうということを提案したら皆さん乗ってきまして、例えば、ある工場では工場の壁面にプロジェクションマッピングで彩ったり、ある工場ではものづくりやっていますから、その技術を生かして芸術作品とコラボさせたりね、いろんなことがあって、会社の活力につながったんですね。ましてや、無味乾燥な工場が人を引きつけるコンテンツになったりする。その価値に気が付き始めたんです。

文化芸術をどうしていこうかなと。僕の頭の中ではまだ当初は、子どもさんたちに夢を与えたいというのがあったので、公約の中に「えひめこどもの城」という広大な場所があるんで、あそこで「えひめ愛顔の子ども芸術祭」というのを始めよう、それと障がい者の皆さんが本当に感性ってのは素晴らしい作品を生み出してきた経緯もあったんで、「障がい者芸術文化祭」というのを、今まで箱の中で小ぢんまりやってたのを「表に出ようよ、みんな」といって、大街道とか、ああいうところで、大々的にやるようにしたり、いろんなことをやってました。

そんなとき、これも、3、4年前だったかな。今治にいるF C今治のオーナーの岡田さんという方から「ちょっと出ておいで」と言われて、会食をしたときに紹介されたのが、東京藝術大学の日比野さんという学長さんだったんですね。3人で食事しながら意気投合して、「せっかく出会ったんだから、愛媛県と東京藝術大学で何かやりましょうよ」というような話で、「他に例のないアートイベントやろう」ということになったんです。

それが昨年やった「アートベンチャーエヒメフェス2025」なんです。これは、本当に先ほどの融合体で「ひめラー」という地域と芸術家を結びつける人材を育成する。そして、その方々が、時間をかけて芸術家と地域の橋渡しをしていく、地域を巻き込んだ芸術祭です。こういう新たな取組だったんですけども、何と作品を募集したら、60作品ぐらい集まったらいいかなと思ったら、300を超える作品の応募が来まして、その中で一般公募で、大阪万博で大人気を博した「null²」館の落合陽一さんっていう、もう日本を代表する芸術家が、一般の部であるイベントに参加してくれたんです。県総合運動公園のテニスコートの裏の古墳を使って落合作品を提示してくれたり、すごい面白いイベントになりました。

更に、第2回どうしようかっていう話をしたときに、3年後ぐらいがいいなと。3年後ぐらいに第2回やろうと。「中村さん、どうせなんだから、その第2回大会にでかいイベントぶつけよう」と言って、「何？」って言ったら、「国民文化祭を誘致しちゃおう」とって宿題出されて、そこから国民文化祭の誘致に入ったんですよ。それで非常にラッキーなことに、ドンピシャで取れまして、だから3年後には、国民文化祭1ヶ月を超える期間やりますから、国民文化祭と第2回「アートベンチャーエヒメフェス」と、「えひめ愛顔の子ども芸術祭」、「障がい者芸術文化祭」の一斉コラボができると。こういう土俵が整うと思うんで、是非そういう学科を抱える伊予高校さん、3年後ですから、是非、どうしたらいいのか、これも何かね学校の現場で考えて進められたらどうかなと思いますんで、よろしくお願い申し上げたいと思います。

芸術祭には伊予高校の生徒さんも参加をしてくれました。今日、いるのかな。参加した人、是非感想を。

（書道部女子生徒） 私たち書道部は、「森のいのち」をテーマにして、大

人の方にも、子どもたちにも楽しんでいただけるように、文字の選び方や、動き方、背景の色などを工夫して、制作に取り組みました。来場していただいた方にはお褒めの言葉をいただける機会があり、私たちの成長につながる良い機会となりました。

以上です。ありがとうございました。

(中村知事) はい。どうもありがとうございます。おそらくそういう大きな会に参加をするっていうことが、スポーツもそうですけども、ただ単に作品を作るにとどまらず、そこで訪れた人との会話であるとか、あるいは言葉のやり取りなんかで、良い意味で感動があったり、感激があったり、それが、人の成長にも結びつくという実体験をしてくれたんではなかろうかなということを今のお話で感じました。

逆に先生から見て、感想ありますか？

(伊予高校教頭) 失礼いたします。私自身も教科の方は、芸術の書道を担当させていただいております。

先ほど、体育館の方では音楽探究の演奏、それから書道のパフォーマンスの発表を御覧いただきました。先ほどお話しいただいた芸術祭の方には、本校から美術部も参加しておりまして、広大な森の中に広がる立体作品も出品させていただきました。先ほど感想を言った生徒がおりましたけれども、実際生徒の様子見てましても、作品を作るところから、完成本番に至るまでのその過程の中で、どのような方々がどう見てくださるのかというのを想像しながら、いろいろと準備したり、計画をしたりしてまいりました。実際、生徒が主体的に取り組んで動いている姿を私自身もその近くで見させてもらいましたし、そのような変化があったように感じております。

(中村知事) はい。どうもありがとうございます。それではほかに。

(田坂委員) 私の方から、高校と大学が連携した教育人材の育成についてお伺いしたいと思います。

この頃、報道されておりますとおり、全国的に教員不足が続いております。本県でも採用倍率が低迷しており、若手教員が早期退職するといった新たな課題も見られております。このような中で、先ほど御紹介がありましたとおり、この春から、伊予高校、それから小松高校で教員養成のコースが設置されます。これを受けまして、県教育委員会と大学の連携による高校生段階から採用までを見通した教員養成の取組が本格的にスタートいたします。具体的には、高校生が教職の魅力、それから教員として必要な知識、技能を肌で感じることができるような大学と連携した授業、そして、現場実習などが実施されると思われます。

そこで、中村知事の御所見をお伺いしたいと思います。教育人材の育成に係る大学との連携について、お考えをお聞かせください。

(中村知事) 人口減少社会、日本全体の問題で、教員に限ることなく、あらゆる産業で人手不足というふうなことが顕在化をしています。これ

ばっかりは本当に、昔の、一番多いときは1年間に270万人の赤ちゃんが生まれていた時代があったけれども、今年はもう70万人を切るというような状況でありますから、起死回生の手立てはないということなんで、どうやれば、これはもう非常に生き方の自由ですから、もう本当に周辺環境を整えるしかないんですけども、出生数を増やしていくためにはどうしたらいいかという抜本的な解決と、これは抜本的な解決にはならないけれども、東京を中心に流出する人口の抑制と、それから、今、移住施策がうまくいってるんですが、他県から愛媛県に来ていただける流入人口の拡大と、そして、良い外国人材の確保、この四つの道筋から政策を展開してる場所なんですけども、教員の世界でも同じように、これも全国的に教員採用が難しい、困難な状況であるということと言うまでもないところでございます。

そういう中で、特に大学との連携が非常に重要になってくる。そして、もう、大学と高校との連携が非常に重要になってくると、こういうふうな考えのもとにいろんなやり取りをしてまして、まず、例えば、愛媛大学の教育学部なんですけども、令和9年度の入試から、愛媛県内で人口の少ないところで、あえて教員になりたいという強い意志を持った受験生を対象にした新しい入試制度を作ることになりましたんで、こういったところも非常に過疎地域における教育現場の教員採用に結びつくことにつながればなと期待をしています。

それから、令和11年度入試からになりますけども、伊予高校も含めて、教員養成コース等で学んで、県内で教員となることを志望する生徒さんを対象にした入試制度を検討するということを聞いておりますので、高校・大学と連携した、愛媛県で教員をやりたいという人材の育成にこれも結びつくことを期待しているところなんです。

それから、松山大学は今年1月に連携協定を締結いたしまして、これに基づいて、大学教員や大学生が、正に伊予高校が得意な県立学校の探究活動、こちらに授業へ参画するような、この連携に基づいて、アクセスが出来たんで、教員人材に関する諸課題をテーマに、課題解決型の学びの時間が充実してくるんじゃないかなというふうに思ってます。

このほかにも、松山大学と東雲女子大学、こちらでは、小学校教諭の普通免許を取得できる教職課程を新設するというふうに聞いております。地元定着にもこれもまた寄与するのではなかろうかというふうに思ってます。

こうした高校と大学が連携していくことによって、愛媛県で教員になりたいという若者が増えてくればなと、そしてその道筋が明確で分かりやすいというアクセスができればなと思ってますんで、全力を尽くして取り組んでまいりたいと思います。

(中村知事) ほかにいかがでしょうか。

(山下委員) それでは私から、公立中学校部活動の地域展開と県立高校

部活動の魅力化について知事にお伺いしたいと思います。

今、活動が大きな転換期を迎える中で、学校の枠を超えて地域みんなで子どもたちを育てる仕組みづくりが不可欠だと私は考えております。私も民間企業の立場として、食品ロスの解消に取り組みながら、その活動を通して、子どもたちの食の支援を行っております。

また、地元の宇和島東高校津島分校、そして水産高校の合同の相撲部では、高校生が小中学生と一緒に汗を流すといった、まさに地域と一体となった活動が根付いております。

このように高校を核として、私たち民間企業や地域住民がそれぞれの強みを生かして、子どもたちを支える姿こそ、これからの理想的な形ではないかと私個人としては考えております。

県立高校が中学生の受け皿となる『魅Can部』のような取組を更に広げ、地域一丸となった教育環境を整えていくことについて、知事のお考えをお聞かせください。

(中村知事) もう、これまた全国的な課題になってきてますけども、公立中学校の部活動の地域展開、これをもう急げという国全体の方針が本編にあって、対応しなければならないという状況になってます。

令和5年度に、県では公立中学校の部活動改革に係る愛媛県推進計画を策定したところでありまして、これ実際にそれを現場で実施するのは市町の教育委員会になりますので、市町の教育委員会に対して県がサポートする立場になりますので、伴走支援を行っております。

受け皿づくりや、それから指導者や財源の確保、特に指導者については県の方が一括していろんな方々をリストアップして、それを派遣するような形の充実を図るということが大きなテーマになってきてると思いますので、力を入れていく必要があると思います。

また、教育長の方から各市町に対して、さっき申し上げたように昔は教育委員会の市長部局、町長部局、県だったら、県教育委員会と知事部局がもう完全分断型だったんですね。

本当に僕は市長の仕事してるときに、教育委員会のことに口出すなと言われてたりですね。それから、教育委員会の人と会うのは予算査定作業だけで、要は現場も分からないわけですよ。こんなんでも査定できないと言ってなんかやり取りした記憶が残ってるんですが、今こういう形でやれるようになりましたから、これ市も町も同じ文化で、やってきますから、市町に対して、市長部局、それから教育委員会、学校地域、ここを連携してくれというようなことを、教育長の方から要請しているところがございます。

令和10年度までに全ての公立中学校の部活動において休日の地域展開を実現させることを目標には置いています。いけるんですかね、教育長。

(教育長) 頑張ります。

(中村知事) 頑張りますって、まずサポートなんで、責任を持ったこと

はちょっと言えないんですけども、それが実現できる、県の立場では伴走支援サポートをしていきたいというふうに思います。令和10年度までを目指すということでございます。

もう一つやってるのは、お話があった『魅C a n 部』の取組なんですけど、これは県立高校の魅力化に資するということふうに思いますし、また公立の中学校の部活動と高校の、なんですかね、連携というものの、それから地域での展開、いろんな波及効果があると思うんで、中高の連携によって、生徒の流出防止や生徒の全国募集、こういった地域活性化に結びついていけたらなというふうに思ってます。

伊予高校では、令和7年度に書道部と男子バレーボールが『魅C a n 部』に指定されたと聞いております。地域で活躍していると聞いてますんで、ちょっと、まず、先生の方から、伊予高校の『魅C a n 部』の状況についてお話いただきたいと思います。

(伊予高校教頭) 本校、先ほどお話いただきましたように、書道部とバレーボールを『魅C a n 部』として指定いただきまして、活動費の補助もいただいて、本当に感謝しております。ありがとうございます。

書道部に関しましては、今日見ていただいたパフォーマンスの時に着用していました袴の上着の部分でも、この『魅C a n 部』の活動費を使わせてもらっています。それから、後でまた話出てくるかもしれませんが、バレーボール部の方も、新しいユニフォームを購入するものに使わせていただいております。

書道部、バレー部共々、校内外のいろいろなところで発表したりですとか、書道部の方でしたら、県の総合文化祭に参加させていただいたりですとか、また地元松前町の文化祭にもパフォーマンスで出せさせていただいております。

このような形で地域との交流を通して、書道部の存在を知っていただいて、これから、来年度以降も継続して書道部の活動の幅を広げていきたいというふうに思っております。

(中村知事) はい、どうもありがとうございます。できれば、『魅C a n 部』の生徒さん。

(男子バレーボール部生徒) はい。失礼します。男子バレーボール部でキャプテンしてます。

男子バレーボールでは、『魅C a n 部』の活動を通して、伊予高バレーボール部を地域に発信して、多くの人に伊予高バレーボール部を知ってもらって、みんなから愛される、応援してもらえるチームを目指して活動してます。

活動内容としては、定期的に幼稚園を訪問して園児の子たちと交流をしたり、小学校、中学校向けのバレーボール教室を開催したり、計画していて、実際、今週の土曜日にも、松前町の小学生向けのバレーボール教室を開催しようとしていて、いくつか訪問させてもらっているんで、

そういうところで、地域との交流をしていきたいなと思ってます。

このような活動を通して、周りの人たちからホームページとかInstagramを「見たよ」とか、「頑張っているね」という声とか、さっきもあったような活動費の補助をしていただいているので、そのお金でユニフォームを新しくさせてもらって、その新しいユニフォームで1月に新人戦で初めて中予3位になることができて、自分たちのモチベーションにもつながったりとか、そういうところで使わせていただいています。

あと、松前町の「はんぎりフェス」に自分たちバレー部で毎年出っていて、今3連覇中で、結構、活躍っていうとあれですけど、させてもらっていて、いろんなところで「はんぎりも強いよね」とか、そういう大会の成績とか、はんぎり、幼稚園との交流っていう部分で、知名度を上げて、最終的には、周りの地域の人たちから愛されて、応援してもらえるチームになれるような、それを目的として活動しています。

(中村知事) はい。皆さん、どうもありがとうございます。地域と関わるっていうことが、本当に愛郷心にもつながるし、人脈のネットワークにつながるんで、本当にこれから、是非、もうひょっとしたら、教えた子たちが伊予高校のバレー部に入ろうっていうことが出てくるかもしれない。部員の確保につながるんじゃないかと思いますんで。

『魅Can部』の方なんですけども、令和6年度は小規模校17校を対象にしたんですが、昨年度は小規模校18校と中規模校17校、中規模については2部、それから、来年度は大規模校を11校、3部を予算で計上する予定になってますので、設置した活動が全県下に広がっていくように、フォローをしていきたいというふうに思ってます。以上です。

(中村知事) ほかにいかがでしょうか。そろそろ時間がまいりました。何か最後ありましたら。

よろしいですか。

それでは本日は貴重なご意見いただきましてありがとうございます。

今日のやり取りでいろんなヒントもあるかと思いますので、今後の県の教育行政、あるいは事務局の政策にも生かしていきたいというふうに思います。貴重な時間ありがとうございます。

以上で閉会のごあいさつさせていただきます。ありがとうございます。

(事務局 副教育長) それでは以上をもちまして、令和7年度愛媛県総合教育会議を閉会いたします。本日はありがとうございました。

閉 会（午後3時32分）